



作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に『ファーストクラスの心配り』、『あなたの人格以上は売れない!』(プレジデント社)、『成「幸」学』(講談社)、『出過ぎる杭は打ちにくい!』(サンマーク出版)、『面白くなくちゃ人生じゃない!』(ロングセラーズ)、『小説・球磨川』(上下巻・ワニブックス)、『雲の上で出会った超一流の仕事の言葉』(あさ出版)などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.7b.biglobe.ne.jp/~sanpercent-club/

21世紀だ! ————— 人生・農業リセット再出発 252

ある朴訥な、ナニワ男の生きざま

秀吉が死ぬと、家康は時を得たりと、夏の陣で大坂城を陥落させて豊臣を滅ぼした。

燃え落ちる大坂城に、ワシは太閤殿に恩義がある!と奮い立って、古道具屋で買った鎧兜を身にまとい炎に飛び込んで消息を絶った一人の百姓がいた。百姓とはいえ河内では名の知れた豪農の主だった。小作人から奉公で小娘たちが豪農本家へ貢がれていたから、10代の若い側女が毎晩付き添った。その中に斜視で美少女でもなかったが、肌の透き通る“お藻”という娘がいた。主には奥さんもいたが、気ままに好き放題に放蕩して子供は一人もいなかった。主のお種を落として貰って、子を産んで地位に収まろうと一滴をせがんだ女たちはいたが、接して漏らさず!で節制していた。そんな主も、お藻には特別の思い入れを持って昼寝など傍で抱いていた。青物だけしか食べさせないで育てると芳香を身体中から発すると聞いて、その通りにやってみたら何とも言えない“良い香りの女体”が出来上がっていた。

お藻など数人の小娘たちを連れ立って大坂の市場に物見遊山で出かけた。歓声や笑い声起きる方へ大衆は興奮気味に押し寄せていた。太閤秀吉が市場に見聞に来ており、気さくに声をかけては冗談を飛ばし、群衆を笑いの渦に巻き込んでいた。幾人もの小娘を引き連れている主が声をかけられた。「若いオナゴたちを引き連れて豪勢じゃのお! 仕事は何じゃ?」「ただの河内の百姓で御座る」「なに、百姓か。余も百姓の生まれじゃ、いやはや、あっぱれ! で、そのオナゴたちでお気に入りは何じゃ?」「このオナゴは美しい香りを身体から発するので御座る」「これは珍しいお宝じゃ。気に入った、余に譲るが良い!」。秀吉一行はお藻

を連れ立って人混みの向こうに消えていった。

半年も過ぎた頃、武士が仰々しく主の屋敷にやってきた。金箔張りのタライに、一匹の大きな鯉が泳いでいた。太閤殿下からの思し召しだった。その夜は、鯉をお藻と重ねて忍びながら、傍で泳がせて、いと惜しんだ。主は下男を連れて丘に登った。頂上から自分の村の領地を眺めながら呟いた。「お藻の鯉を泳がせるに、あそこから、あそこまで大きな池を掘る!」。一匹の鯉を泳がせる池を掘るために、小作人たちを集めて、とんでもない大土木作業が夜を徹して始まった。数カ月かけて向こうの淀川から、こちらの川まで繋ぐように掘り進む大きな池は、いつしか大坂アキンドたちの興味が増大し、これを運河にすると中心街にゴッツイ大商圏ができるぞ!と期待を膨らませ、出資をすからと気運が高まった。主は、そうだ、お藻が鯉になって思いっきり泳ぎ回るなら、それも面白い!と、大勢の小作人たちを更に動員して増々やる気になって掘り進めた。

お藻が死んだ……との知らせが届いた。太閤殿下^{よとぎ}に気に入られて譲りはしたものの、お藻は一夜限りの夜伽^{よとぎ}だけで、後は孤独な日々を過ごしたと聞く。主は布団にうずくまって、お藻を不憫な世界へ手放してしまった悔恨の情で、一人で夜通し号泣した。ほどなくして、大坂城は炎上、陥落。主は、その壮大な手掘りの運河の完成を見ずして、炎に包まれて茶毘^{たひ}に付されて、あの世でお藻に会いに旅立ったのだ。その愚直な天衣無縫の人生を貫き通した浪花男の名は、安井道頓。彼の名を取って、今も大阪の繁華街を彩る「道頓堀」と言う。世にも稀な破天荒な経緯と、淡い恋慕に費やした一生の壮大な口マンを知る者は少ない。